

Title	古代支那民族の祖先祭祀
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.4 (1922. 8) ,p.49(527)- 71(549)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220800-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古代支那民族の祖先祭祀

古代支那民族の靈魂に對する觀念は、ほゞ二様に分れておる。一は死後肉體を離れて高く天翔りゆく靈、乃ち魄であり、一は肉體に依存した靈、乃ち魄である。

禮記郊特性に「魂氣は天に歸し、形魄は地に歸す」と云ひ、禮運に體魄は則ち降り、知氣は上に在りと述べておる。人はその玉の緒が斷たれる時呼吸は止り、心藏の微動は停止する。靈魂は人の吐き吸ふ空氣の如きものであり、死後鼻或は口を通じ逃れ去り、上昇するのではなからうか。素朴な心理からかくの如く觀せられた靈魂を彼等は魂、魂氣、或は知氣と云ふ名をもつて呼んだのである。説文によれば魂なる文字は、初め云、乃ち雲といふ文字の古形と相通用しておつたらしい。口から吐く息が冷えた空氣にあたつて凝結する。その状態の雲に似たるを同じ象形文字によつて表したものであらうか。

形魄、體魄は文字の如く身體に依存する魂である。天地山川草木にまで靈力の遍在を認められた古代人

は、靈妙極まりなき人間そのものの身體に神秘な力の遍在を認め、之を魄、形魄、體魄と云ふ名をもつて呼んだのである。魄なる文字は白と云ふ字に従つてゐる。鄭氏は、耳目の聰明魄となすと解し、説文解字註引く孝經説には魄白也白明白也と云つておる。左傳の襄公廿九年の條に「天又之を除し、泊有が魄を奪ふ」と記し、左傳宣公十五年に「原叔必ず大咎あらん。天之が魄を奪へり」とあるを見れば魄なる文字は、その人の心の精爽を指しており、判斷力を失ひ、氣拔けの様になつたものを魄を失ひし人と云つたのであると解する事が出来る。然しながら判斷の明晰を白なる文字をもつて表し、之を靈魂の一種とみたとするのは原始人の思考としては稍無理ではあるまいか。靈魂を青白きものと解するは未開人共通の思考であつて、ニューギニア、トーレスストレイトの部族は幽魂を *malaka* と云ふ白を意味する語で表しておる。蠻人の間にあつて白色人種は往々にして死人の再生と見誤られ、探検家クツクが一七七七年 *Hevey-Inseln* の土人により鬼神視され、その衣服を解いてその皮膚の眞白さや否やを檢せられたと云ふ挿話は人口に膾炙しておる。(Vischer: Religion u. Soziales Leben bei den Naturvölkern. 8194) 支那民族の「魄」が白字からなつておるのも靈魂自體の色が白色と觀せられたためではなからうか。わけてこの靈魂は肉體殊に骨に依存せるものであり、骨の白色なるより誘導せられたのであると云ふ假定も此場合一考すべきではなからうか。

禮記の祭儀に孔子の言として「氣や神の盛也、魄や鬼の盛也、鬼と神とを合するは教の至也、衆生必ず死す、死すれば必ず土に歸る。此之を鬼と謂ふ。骨肉は下に斃れ、陰れて野土となる。其氣は上に發揚して昭明となる。焄蒿悽愴たるは此百物の精也。神の著るる也」と述べ、陽の氣は人の死後上昇して神と

なり、魄は地に歸し鬼となると云ふ説を擧げておる。然も此説は著しく哲學的思考を終た考であつて、必ずしも儒者以外に一般的に使用せられたものでない。例へば墨子は、天鬼と云ふ語を屢用ひ、その公孟篇に、「儒之道以て天下を喪ふにたるもの四政あり。儒は天をもつて不明となす。鬼をもつて不神となす。天鬼をば説かず。以て天下を喪ふにたる」と云ふが如き鬼と神とを同一視しておるのである。説文によれば「人歸する所鬼たり、鬼頭に象る。鬼陰氣賊害す。故にムに从ふ」とある。鬼は人の死後歸する所なるが故かく呼び陰氣人を害ふ性質ありと解しておる。篋室殷契類纂にも殷代文字として𠄎𠄎等の異體をあげておる。此等の文字は古代人が亡靈を如何なる形として觀じたるかを明瞭に物語る好個の記念物であり、巨大なその顔面、不釣合なその軀幹、當時の人の鬼に對する恐怖の情を如何にもよく表しておる。

さらに古代文献の中から鬼に對する古代人の考を窺つてみると鬼は吾人の眼をもつて見る事の難い幽暗の性であり、(詩經小雅何人斯云、鬼たり蠖たらば、即ち得べからず)人に崇り、その精神を亂し肉體を病ましめる。(韓非子解老篇云、鬼(不)崇りて人を疾ましむ、之を鬼人を傷すと謂ふ。人之を逐除す。之人鬼を傷すと謂ふ。)王侯貴人の如くその生存中物精を強く用ひしものは其魂魄又つよく、匹夫匹婦と雖も無理死せしものはその魂魄人に馮依して淫厲をなすのである。(昭公七年子産の言參照)人に馮依した靈魂を逐除せむが爲め、或は鼓を鳴し、鐸を振り、或は沐浴し齊戒せしめる。(困學紀聞莊子逸篇を引いて云ふ、游島雄黃に問ふて曰く、今疫を逐ひ魅を出し鼓を擊ち呼喚するは何ぞや、雄黃曰く、黔首疫多し、黃帝氏巫咸を立て、黔首をして沐浴齊戒、以て九竅を通じ、鼓を鳴し鐸を振り、

以て其心を動し、形を勞し趨歩以て陰陽の氣を發し、酒を飲し、葱を茹し、以て五臟を通せしむ。失れ鼓を撃ち呼噪し疫を逐ふは魅鬼を出すなり、黔首知らず、以て魅崇となす也。(韓非子翼蠹による)なほ韓非子内儲説下に燕の人の妻私に通じおりし男の自家より出づる所を夫に發見され、うまく之をだまして鬼を見たるなりと思ひこまし、犬の糞の中に浴して本性に復せしめんとせし一笑話出づ。

又古代支那の儀禮の中には鬼に對する本來の感情を無意識的に表白した點が極めて多い。禮記檀弓下に「君臣喪に臨むや、巫祝桃茢執戈を以つてす。之を惡む也」とあるは、云ふまでもなく死の邪氣を此等の具によつて祓除せむとするのである。哀悼の表現たる哭踊服喪の風も最初においては遺族の悲歎の狀を誇示してその崇を避けむとする手段に外ならぬ。死者の口に米或は珠を含ませたり、死者に親近せし者を殉せしめ、その遺愛の車馬を埋葬したりする習俗も死者をして他界に於てその生活を永續せしめ現世に歸りくるを防ぐために外ならぬ。禮記檀弓上に「中霤を掘りて浴し、竈を毀ち以て足を綴し、葬するに及び、宗を毀ち、以て行を躡み大門より出づ、殷道也學者之を行ふ」とある中、室中に坎を掘り、死者を浴し、その水を穴の中に捨つる習慣は、死人の穢を除かんとする魔術的手段であり、竈を毀ち、その土をもつて連綴する習慣は、死者を束縛し、その亡魂を歸來せしめざらしめむとする意圖に出で、宗廟の西の牆を毀ち、柩を出す習慣は、亡魂の再び歸來して普通の門を出入するを恐れし結果である。以上の習慣ははたして殷代からの習俗であつたか疑問であるが、葬式と云ふものはみだりに古へからの慣例を變へぬものであるからとにかく前代の儀禮を幾分保持せるものと見る事が出來やう。

陰慘な物恐しいこの「鬼」の觀念に對し、「神」なる觀念はやゝ陽氣な明るい感じを抱かせる。説文は、神宇を説明し、「天神萬物を引き出すなり」と説き、その扁示を「天象を垂れ、吉凶を見し、人に示す所以なり。二に従ふ。三垂は日月星也」と云ひ、申は神也と解しておる。山中笑氏の人類學雜誌二百七十六號に既に云へるが如く申は電光を象形せしもの、天空に鳴り轟き巨木を引き裂き、人畜を害する雷をもつて神となし、その電光を神の象形となしたのである。則ち文字造爲の心理より云へば神は全く天象より導き出されしものなることは明かである。従つて鬼がもと陰暗なる死靈なりしに反し、神は最初より光明を有せる天空の威力の象徴であつたのである。鬼が陰氣であり、神が陽氣であるとせられたのも無理ならざる次第である。

二

古代支那に於ける祭祀の原始的形式を窺ふことは文献の乏しいため甚だ困難である。禮記の王制に「天子は天地を祭り諸侯は社稷を祭り大夫五祀を祭るといひ、王充の論衡に「王者天地を祭り諸侯山川を祭り卿大夫五祀を祭り士庶人其先を祭る」と述べておるのは後世の考であつて原始の状態でないことは明白である。天子のみ天地を祭るといふ思想は、支那中原を支配した君主が自らを天の子孫なりと假託したゝめ生じた觀念である。左傳宣公三年の條に「鄭文公賤妾あり。燕媾と曰ふ。夢に天己に蘭を興へしめて曰く、余を伯儵となす、余は而の祖也」とあるごとく祖先伯儵をよぶに天なる語をもつてしておるのは天と祖靈とを同一視してゐる證ではあるまいか。氣息と同一視せられる靈魂が死後

上昇して天にゆくと信ぜられ、祭祖の様式と祭天の様式とが合致してくるのは當然のことである。宗廟の祭祀に際し牲を殺してその脂を取り、蕭に塗りて之を焼き、その臭を天に達つせしめ、天にある魂を招く祊の習慣の如き、玉帛又は犠牲を焼きて其煙燭を天に達つせしむる燔柴の儀式とも起源を同じくするものではなからうか。

天をさまよふ靈魂の事であるから之を招くに高く突出せるものが入る。儀禮の士喪禮に見える人死するや一丈三尺の木を中庭に立て之に簪をかけ、二つの鼎をつるし、その中に死人の口に含ましめし飯米の残りを入れて粥につくる所謂重の習俗は、恐らく、天に浮遊する靈魂を招きよせ、之に食をそなへむとする手段であらう。詩經陳風に「坎として其れ鼓を撃つ、宛丘の下、冬となく夏となく、其鷺羽に値ふ」とあるは師古の漢書地理志の註に従へば、鷺羽を神の降る目標として立て鼓を撃ち、舞をなして神を招かむとしたのである。(値立也鷺羽の羽以て翹となし、之を立てて舞ふ、以て神に事ふる也)。同じく陳風の「東門の粉、宛丘の栩、子仲の子、其下に婆娑す。」とあるのも師古の註に従へば、木によつて神を招かむとした信仰を語るものである。滿州民族が祖先を祭るに神杆を庭に植え、錫盤を貫きかけ犠牲の肉を盤中に置き、もつて天における祖靈を招く習慣を後世の支那人が、祭天の風と混同しておるが、支那民族の間にあつても未開時代にあつては祭祖の風と祭天の風は嚴密なる區別をたてえられなかつたものらしい。

地の祭もこれと同様である。王制の記事によれば大地の祀は王者の職務であり、土の神たる社穀物の神たる稷を祀るのは諸侯の職務であると規定されてゐるが、宗廟の祭に鬱金を秬草の酒に和したる

鬱鬱の酒を地に灌ぎその臭によつて地下にある魄を招きよせるのは地を祭る儀式の原始的形式ではなからうか。社の如きもその祭壇に樹木を植えて神位に象つてある。シャバンヌ教授も「これは恐らく最初は神聖なる森林に對する畏怖の感情より起りしものであつてついで一本の木、さては又木柱、石柱をもつて表徴する様に變化したのではなからうか」と云つておる。輕々しい類推論をたてる事は避けなければならぬが古代支那の「社」は、朝鮮民族の蘇塗（魏志に云ふ。馬韓鬼神を信ず。國邑一人を立て天神を祭るを主る。之を天君と名く。又諸國各別邑あり。之を名けて蘇塗となす。大本を立て鈴鼓を懸け、鬼神に事ふ。諸亡逃れて其中に至る。皆之を還さず。）日本民族の神奈備、近世まで對島に存せる率土、琉球人のオタケと比較研究すべきものであり、そして此等諸民族にあつて此等の聖林が天なる神を招き鎮まらしめる聖域であつたことと考へあはすべきである。

要するに天地を祭るは王者、社稷を祭るは諸侯といふ風に祭祀の分業の規定されたのは極めて後代の事實であつて最初からけしてかゝる劃然たる區別の存在したわけではない。恐らく祖先の靈を祭る祭祀の形式は、必然天地を祭る祭祀の形式を伴隨してゐたのであらう。

古代支那の貴族階級は祖先の靈に日常奉仕せんがため宗廟の制を有してゐた。そしてその廟の中に木主を安置し、祖先の魂魄の馮る所となしたのである。木主は桑、柏、松等をもつて造り、或場合は束帛、茅又は石をもつてする。

宗廟は古代支那民族の信仰の中心であり社會生活の中心であつた。殊に上代の一切の儀禮は宗廟を中心として形ち造られたのである。

祭統に云ふ。「國君夫人を取^ルる辭に曰く、請ふ、君の玉女寡人と敵邑を有ち、宗廟社穆に事へむと。此助を求むるの本也。其祭や必ず夫婦之を親らす。外内の官に備ふる所以なり。云々」。婚姻と宗廟と密接な關係あることが推察される。婦を迎ふるにも祖廟に告げてゆき、歸來廟に又その旨を告げる。由來婚姻は一氏族の族人が、おのれの族との縁を絶つて新たなる氏族に歸する事を意味しておる。従つて女は己の廟に見えて別を告げ、夫家に入り、三ヶ月齋戒して後始めて廟見し、かくして始めて來婦と呼ばれ、ついで祖廟をまつり完全にその氏族の一員となり、婦の義をなすのである。(曾子問。三月にして廟見し來婦と稱するなり。日を擇びて禰に祭る。婦の義を成すなり。)廟見の儀式を怠りし場合は世人の擯斥を受けざるを得なかつた。(左傳隱公八年の條鄭の公子忽陳に如きて婦媯を逆ふ。辛亥媯氏を以て歸る。……先配して後に祖す。子曰く。是夫婦爲らず。其祖を誣ふ。禮に非ざる也。何を以て能く育せん。)

冠禮は未成年者が成年に達せし際の儀式であるが之も宗廟と密接な關係をもつておる。禮記冠義に従へば冠せむとするときはまづ日を筮し、次に子に冠せむとする人を筮す。その日に至れば主人賓を導き廟に入り、賓坐につけば右手に頂を執り左手に前をとり、進んで祝つて、筮の前に坐して乃ち冠せしめる。冠者ついで母に見え、兄弟姉妹に見え、ついで服をかへて君及び郷大夫郷先生に見える。かくて後初めて成人として遇せられたのである。

戰爭の勝敗も又祖靈の加護に左右せられねばならぬ。即ち出陣の時師を帥ゆる者祖廟に於て命を受け、祖先の神靈のやどる木主を齋車に乗せて軍に従つたのである。そして命を用ひし將士を賞するに

祖の前に於てした。

國家の建設もまづ宗廟と社稷の建設によつて先だてられねばならない。宗廟の祭祀こそ王が人心を萃聚して天下を治むる最良の手段であつた。(易經萃の卦。萃^{ハトホル}享^{イタル}王假^{ニ有廟}ニ)

禮記王制に廟制を左の如く規定しておる。「天子七廟、三昭三穆、太祖の廟と七、諸侯五廟、二昭二穆、太祖の廟と五、大夫三廟、一昭一穆、太祖の廟と三、士一廟、庶人寢に祭る。」とあり、祭法には、「王七廟を立つ、一壇一墀、考廟と曰ひ、王考廟と曰ひ、皇考廟と曰ひ、顯考廟と曰ひ、祖考廟と曰ふ。皆之を月祭す。遠廟を祧となす。二祧あり。享嘗して乃ち止む。祧を去つて壇と爲し、壇を去つて墀となす。壇墀禱あれば之を祭る。禱なければ乃ち止む。墀を去つて鬼と曰ふ。諸侯五廟を立つ。一壇一墀、考廟と曰ひ、王考廟と曰ひ、皇考廟と曰ふ。皆之を月祭す。顯考廟祖考廟享嘗して乃ち止む。祖を去つて壇となす。壇を去つて壇となす。壇墀禱あれば之を祭る。禱なければ乃ち止む。壇を去つて鬼となす。大夫三廟二壇を立つ。考廟と曰ひ、王考廟と曰ひ、皇考廟と曰ふ。享嘗して乃ち止む。顯考廟考廟なし。禱あれば壇を爲して之を祭る。壇を去つて鬼となす。適士二廟一壇、考廟と曰ひ、王考廟と曰ひ、享嘗して乃ち止む。顯考廟なし。禱あれば壇を爲して之を祭る。壇を去つて鬼となす。官師一廟、考廟と曰ふ。王考廟なくして之を祭る。王考を去つて鬼となす。庶士庶人廟なし。死して鬼と曰ふ。」とある。即ち王制は大夫も太祖廟ありと記すに反し、祭法は、太祖に當る祖考廟なしと記しておる。王制は士一廟と記すに反し、祭法は適士二廟と傳へておる。制度の明確なる規定は今日之を窺ふことが出来ぬ。

三

宗廟の祭は四季に行はれ、春を祠、夏を禱、秋を嘗、冬を蒸と云ひ、數年毎に禘と云ふ大祭を行ふ。祭祀の形式は種々なる原始的様式を保存しておる。その一は尸であらう。祭に先立つて吉日を筮し、又齋戒して身神を淨め、神の代理たる尸を選ぶ。尸は祭の主となるものであつて、神は此尸に憑依すると信せられておるのである。禮記曾子間に「尸必ず孫を以てす。孫幼なれば即ち人をして之を抱かしむ。」とある如く尸をたてるには必ず死者の孫にあたる人をもつてする。尸に關しては最近狩野博士が雑誌「支那學」の紙上に詳密なる研究を發表せられた。博士は、「死者の魂は恐らく生者の形體に生れかはると信せられ、又祭の場合に子孫の形體にやどると考へられ、従つて此等の者の一人を選んで祭の主となしたのであらう。」と云はれ、更に尸を立てるに孫をもつてする理由については、「愚見あれども略す。」と云はれておるが、自分は之は恐らく死者の靈魂が孫にやどるいふ迷信にその根據があるだらうとおもふ。博士も之と同一の考を有しておられるのではなからうか。

フィジー諸島の Vauua-Ievu と云ふ島に於ては、祖父は孫に對し父の子に對するよりも親縁な關係を持つておる。従つて祖父の死せる場合その靈魂が孫の靈を件つて他界に赴くを防がんとして土人は老人の死骸のまはりを幼孫をかついでぐる／＼廻轉し、老人の靈をして充分眩惑せしめたのち突然孫をかゝへて逃げ去つてしまふ。かくして子供を見失はしめたのち老人の屍を塚の中に埋めてしまふ。

(Fraser: Belief in immortality. page 416) Marquesas 群島の 一 Nukahiva 島に於ては祖父の靈魂は孫

の體内にやどると信せられておる。もし不妊の妻が死んだ祖父の屍の下にたつならば必ず妊娠すると信せられておる。又 Borneo の Kayans も祖父の靈魂は孫の中の一人に傳はると信じ、これを容易ならしめんため、老人は孫を時々頭上にさ上げ、かつ祖父はその名をつねに最年長の孫に傳へる。(Fraser: Totemism and Exogamy. vol. 3 page 297)

此同名を稱するといふ習慣は、その者の靈魂が同名者に再生したと信せられてゐるからである。琉球八重山では子供には祖父の名をつける習慣がある。Romagna に於ては祖父の叔父、その他の親戚の名を子供にあたへ、Valdeka に於ては子供には最近物故した家族名を興へる。(Hartland: Primitive Paternity. vol. I. page 225) エスキモー土人は祭に同名の者を尸にたて之に食物を供へる。皆同名の者が死者の再來と考へられてゐるからである。

恐らく支那民族に於て孫を尸にたてるといふ習俗は最初に於て死者の靈が孫にやどると云ふ迷信に起源を發つしてゐるのであらう。フレイザーはかゝる信仰の起源を解釋して左の如く述べておる。一體母系の異族結婚の社會に於ては祖父と孫とは常に同様な異族結婚のクラスに屬し、之に反し父と子は常に相離れたクラスに屬しておる。なんとなれば子は母に屬するからであり、父と母とは必ず部落を異にすることを要するからである。祖父の靈が孫に生れかはるといふ信仰は恐らく異族結婚が母系と共存し孫と祖父の關係が特別に密なる社會に生じたものであらう云々。然も異族結婚は存在すれども、母系制の存否の不確かな支那民族にかゝる推論を敢てするのは今の所危険である。自分は此問題に就て考察するのは後にゆづつてたゞ次の二事實、隔世遺傳の法則から孫と祖父の間に極めて形貌の類似

したものが生れるといふ事實、並びに祖父が死ぬ頃大抵孫が生れるといふ事實、此二理由から孫が祖父の再生であるといふ迷信が生じたのではなからうかといふ推定をたてるに止めて置く。

廟制上の昭穆といふ考も此迷信から説明出来るやうに思はれる。昭穆とは廟の排列の順序である。

太祖の廟を中央におき、二世四世六世の廟を左に置き之を昭といひ、三世五世七世の廟は右におかれ
て穆といふ。周の場合に於ては后稷は太祖であり、文王は穆、武王は昭である。それより一代毎に昭穆
昭穆と南に順をおふて排列する。太祖と文武兩王の廟は百世不遷であるが他の三昭三穆は七廟以上
なると古いものからこぼつてゆく。かくの如く世をことにするに従ひ廟の列を異にし、一世を隔つ
とに同一列に置かれる理由は、恐らく祭祀の時孫行のものが死者の尸となる習俗より由來するもので
あり、かくの如き習俗は恐らく死者の靈の孫にのりうつると信せられし事實に由來したものであらう。

四

宗廟の祭祀の重要な要素である犠牲の儀式も祭祀の原始的意義を闡明するものとして注意しなければならぬ。曲禮に従へば天子は肥えたる純毛の牛を用ひ、諸侯は肥牛を用ひ、大夫は索牛とて特に牛を求めて用ひ、士は羊或は三日以上養牲處にて養ひたる肥えたる豚を用ふ。祭義に従へば祭の日に君自ら牲を迎へ、之を牽き、太子君に對して共に牽き、卿大夫之に従ふ。そして廟門に入り、碑に繋ぐ。すると卿大夫はだぬぎて牲牛の毛をとり神に耳の毛をまづすゝむ。次に鸞刀にて牛を割き、胙脊をとりさゝげ退く。次に爛骨とて湯にて茹でたる肉、腥肉とて生肉を俎に乗せてさゝげまつる。しかも祭

統、禮器、郊特性、樂記等の記述に従へば犠牲をほふるは卿大夫にあらずして君自ら肉袒し鸞刀をとつてはふるとある。此事實は如何に上代支那に於て犠牲が重んぜられしかを語るものであるが、更に注意すべきは犠牲となる動物が祭祀者にとり神聖祀せられおりし事である。王制に従へば「諸侯故無くして牛を殺さず。大夫故無くして羊を殺さず。士故無くして、犬豕を殺さず。庶人故無くして珍を食はず。」とあり、禮事に非れば此等の動物を殺さず、珍物を食はざる事を規定してある。月令季夏の條によれば「是月也、四監に命じ、大いに百縣の秩芻を合し、犠牲を養ふ。」とあり、祭儀には「古者天子諸侯必ず養獸の官あり。歳時に及び齊戒沐浴、躬之に朝し、犠牲祭牲必ず是に於て之を取る。敬の至也。君牛を召して納めて之を視る。其毛を擇び、之を卜して吉、然る後之を養ふ。君皮辨素積朔月。月半に君牲を巡り、力を致す所以、孝の至也。」とある。祭祀者つとめて慎重の態度をとり犠牲を選び之を養ふのである。何故にかくの如く犠牲を尊重するのであらうか。此問題を考察すると祭祀の原始的意義が一層明確に知り得るのである。

まづ進んで犠牲の處置を考察してみると、禮記によれば祭に際し、まづ水と犠牲の血と毛とをすゝめ、かつ肺、肝、心臓を生のまま、俎にのせてそなふるのである。ついでその骨肉を汁の中に入れて煮熟したり、又は燔炙したりしてすゝめ、かつ君と夫人と交も醴醢を献じて魂魄を悦ばす、さらに又退き、前に汁を入れて神に薦めたるものなどを皆改めて煮て薦めるのである。

この祭に際し血及び毛を供へる儀式をもつて禮記郊特性は性の完全なるを神に告ぐるなりと云ひ、肺、肝、心を祭るは氣の主を貴ぶなりと云ひ、禮記禮運には古への人は鳥獸の肉を食ひ、其血を飲み、

其毛を食ひしをもつて上帝鬼神を祭るや古への風に從ひ、かゝる物を供へるのであると説明し、林泰輔博士も此解釋に倣つて野蠻時代に於ける獸類生食の遺風なるべしと説いておる。

然しながら此習慣は灌祭又は潘祭の形式をとつてひろく未開人の間におこなはれる習慣であつて必ずしも未開時代の獸類生食の風と解釋する事を要せず、むしろ幽暗なる性質をおびし鬼神は生人の如く具象的な食物を攝取する事あたはず、之を氣體又は液體に化して捧げねばならぬと云ふ原始人の心理にその源を發するのではなからうか。

加ふるに血液は未開人種に於て靈魂の宿る所と思惟されておる。兄弟の縁を結ぶ時身體を傷けて血を交換したり、成年式の際その若者に血を灌ぐことは多くの種族の間に見られる共通現象である。古代支那において盟約の場合犠牲を殺してその血を飲つたり、左傳定公四年莊公卅二年の條に見ゆる如く、胸の血、臂の血をとつて盟つたりするのも、血を生命と考へ、血を飲ることによつて同胞となると考へしたためである。又呼吸器と關係深き肺藏、生殖器と聯絡せる腎藏、その他肝藏、脾藏も靈魂のやどる所と考へられてゐた。禮記月令に「春は其祀戸、祭脾を先にす。夏は其祀竈、祭肺を先にす。中央は其祀中霤、祭心を先にす。秋は其祀門、祭肺を先にす。冬は其祀行祭、祭腎を先にす。」とあり、脾、肺、心、肝、腎をもつて重要な供物としたるは此等が何れも靈魂の宿る所と考へられたからである。その他毛又は爪もその生長の迅速な所から未開人は之を靈魂の宿る所と考へてゐた。それ故支那古代祖先祭祀に於て血、毛、肺、肝をもつて供物としたのもこれによつて死者に新たなる靈魂を吹きこみ更に一層大いなる活力を有せしめむとしたに外ならぬ。

神に犠牲を獻せし後、尸は祝に命じて嘏辭を主人に傳へしむる。此嘏辭を讀めば祭の目的が本來何であつたかが窺はれるのである。即ち詩經に表れたるその文句は、「ト爾萬壽無極（天保篇）」とか「苾芬孝祀。神嗜飲食。ト爾百福。如幾如式。既齊既稷。既匡既敕。永錫爾極。時萬時億。（楚次篇）」の如き類である。此嘏を授くる事が終れば、孝孫は規定の位置につく。祝は爰に祭禮の終ることを尸に告げ、尸は酔ひて立ち「肆夏」の樂をもつて之を送るのである。

ついで餽にうつる。餽とは祭肉の餘を食する事である。詩經によれば尸たつて祭物を徹つしてから、賓客たちには俎肉を贈り、同姓の諸父兄弟は更に寢に於て宴する。此時同姓の臣、長となく幼となく稽首して神は主人をして壽考ならしめむと云ふ賀辭を述べるのである。祭統によれば、「夫祭に餽することあり、餽は祭の未也、知らざるべからざるなり。是故に古の人言あり。曰く善く終ふ者は始めて餽する如し。其是已、是故に古の君子曰く、尸亦鬼神の余を餽する也、惠術也、以て政を觀るべし。是故に尸諉ちて君卿と四人餽す君起ちて大夫六人餽す。臣君の餘を餽する也。大夫起ち士八人餽す。賤しきものは貴の餘を餽する也。士起ちて各其具を執りて以て出で堂下に陳す。百官餽して之を徹す。下上の餘を餽する也。」とあるごとくその作者は祭餘の物を食ふはその思惠を廟中に奉仕する臣下に偏く施すのであるといふ見解をとつておる。しかしながらこれは恐らく最初から必ずしも惠を施すといふやうな意味でなく、古き氏族生活に於ける族人一體と云ふ民主的觀念より生れた習俗であらう。儀禮饋食禮に「祝曰養有以也」とあり、鄭氏註に、「先祖德あるをもつて此祭を享くる。其坐して其餘を養するは亦之以あるべし。」とある。養は即ち餽であつて此習俗の重要なる意義ある事を述べておるのである。

る。天子宗廟の祭をなすや必ずその祭肉(胙)を同姓の諸侯におくる。異姓に賜はるは例外の場合であつたのである。おもふに族人相會して神聖なる動物を殺しその毛と血を神にさづけ、その肉を族人共に食ふといふ儀式は、同一物を神と人とが共に食すると云ふ點に主要なるその意義を有しておつたのであらう。氏族は神なる祖先とそれより出でたりと信じたる族人の集團である。祭の場合犠牲の肉を頽ち食ふのは之によつて神と族人との結合を一層密ならしめんとする手段である。此場合犠牲は尋常の動物ではない。神にさづけられ、神に合體せる聖物である。その聖獣の肉を頽つことによつてそれによどる聖靈がたまねく陪食者に配分せられ、各個人の生命にやどり、もつて神と一族との間のきづなが一層かたく結ばれんことを欲つしたのである。かくして祭祀は族人和合といふ重要な結果を生ずるに至るのである。此聖獣の名が牲とよばれ、氏族の原始團體姓と一致するのは偶然ではない。恐らく最初にあつては兩者共に生とよばれ、後に之を區別するため一方に牛扁一方に女扁を附するに至つたのではなからうか。

田崎仁義氏はその日本社會學院年報第二年に掲載せられたる「トオテミズムの起源及び支那太古に於ける此制度の存否」と云ふ論文の中に犠牲とトオテミズムの關係に就て論及せられておる。今その一節を引用してみると、「祭祀の根本意義は如何と謂ふに『禮記』「祭義」に曰く、君子反古復始不忘其所由生也云々とあり、祭祀の根本義は古に反り始に復し其の由て生ずる所を忘れざるにあり、此は祭の精神上的の意義を説明したるものとして相當の文化民族にとりても其理由ありと認む可し、而も之を神に牲を供して其下り物を食ふ事を祭の重要儀式となす事と結びつくる時は此事は吾人に願

る興味ある暗示を興ふるものの如く考ふるを禁ずる能はざるなり。吾人は牲の餒を食ふ事が肉體上の
反古復始不忘其所由生也を表現するものにあらずや。換言すればトイミズムに於てトイテム族民が
一定の時一定の儀式に於て其トイテムを食し以てトイテムと自身とのアイデンチターを濃厚ならしむ
るの習俗あると同様の意義に出づるものにあらざるか、トイテム族が己がトイテムを食するの意義は
稍々六ヶ敷漢語を使用する時は君子反古復始不忘其所由生也と謂ふが如き語をもつて表示せらる可
く、トイテム族がトイテム肉を喰ふは彼等の頗る重要な儀式又は祭儀に於てし、而して其の牲即ち
トイテムを屠殺するものは其蕃社中の最高長老又は酋長の當る所なる等上記三項(1)配天の祖祭に
必ず牲を用ふる事、(2)牲は王自ら之を迎へ之を曳き之を刺殺するを以て禮とせるものにして祭儀中
頗る重要なものとなりし事。(3)祭神に供したる牲の餒即ち下り物は之を一同に食したる事、)と相
對照して甚しく相似せるものあるを認めざるを得ず、勿論三代の時代はトイミズムの流行すべき原
始的社會と其文化の進程に於て大なる懸隔を有するは言を待たざる所なりと雖も祭祀の如きは一般に
最も古風を貴び古俗を保存維持するを常とするものなれば右の如きトイミズムの遺習が三代祭祀の
儀式上に遺存せられたるにあらずやと推測するを得可く其推測たるや上記の事柄のみを根據とするも
甚だしく有力ならずとは云ふ可からずと信する處なり。」

次に會盟に牲を用ふる事を左の如く論じておる。

「トイミズムに於てはトイテム族が一定の時期一定の儀式に於て其トイテムを食しその當視(アイ
デンチファイ)を濃厚ならしむる習俗あるを常とする事既に幾度も述べたる所なるが然らば牛のトイ

テムのものは時に牛を喰い其血を飲みてトータムたる牛と自身との當視を濃厚ならしむ可く、而して此制度習俗が因習してトータムと其トータム族の祖先との感生關係は世代を重ね末流に至るに隨て邈然不明確なるものに思意せらるるに至りたる後も、曾て當視を濃厚ならしめんが爲めに行ひたる食肉飲血の事のみは一定の儀式として後世に繼續維持せられて儼存したるが爲めトータミズムの本來の起源たる感生の事は等閑に附し去られて食肉飲血の儀式が重要視せられトータムの肉を食ひ血を飲むの儀式を行ふ時は其人の本來の血統種族の異同如何に拘らず後天的に擬制的に兄弟分となり、親類分となるものとの感覺信念を固成せるものなる可し、支那古代の諸侯の會盟に牲を割きて其血を飲み其肉を喰ひたる儀式の存遺せるの事實を解するに斯かる起源よりするものと倣す時は此儀式は其往古に於てトータミズムが存在流行したりし論證料となる事を得可し。

犠牲の觀念をトータミズムから説明せんとした人には泰西の學者にロバートソン・スミスがある。氏はその不朽の名著『セム人の宗教』中にアラビヤ人の犠牲に就て論述し、ついで他の古代民族の習慣に及んでおる。

彼は云ふ。セム種族の中最も原始的な犠牲を行ふのはアラビヤ人である。然してそのアラビヤ人の犠牲に關する最古の記述は *Niles* のものである。犠牲と選ばれし駱駝は粗末な石堆祭壇の上に結びつけられ、祭司が三度讃歌を唱しつゝ信者達を率ひ莊嚴に祭壇の周圍をめぐる。そしてその歌の終りの句が會衆の唇からまだ消えぬ中彼はまづ犠牲に第一撃を加へ、奔り出る鮮血を迅速に啜る。とつゞいて全會衆がその劔をもつて犠牲に飛掛り、未だ微動する肉を寸斷し生のまゝ躁急に呑み込んでしまふ。

此儀式の初まるのは宵の明星の上昇時であるがそれから此星が朝日のため光が次第に薄れて遂に消滅するに至るごく短時間の間に駱駝の全身は、その體も骨も皮も血も内臓も全部平げられてしまふのである。(同書三二〇頁)

アラビヤ人に於て駱駝の肉を食ふといふことは或意味に於て宗教的行爲として見做されてゐた。彼等は個人的費消に駱駝を屠殺することを嫌惡した。たとひ饑餓に迫られても屠殺は氏族として行ふに非ざれば不當なりと信じてゐた。此點は丁度同じ氏族の所屬員の血を流すといふ場合その族人全體の承諾と共同執行を必要とする事情によく似ておる。未開人は後代の人のやうな動物の生命の神聖であるといふ觀念をもつてゐない。又人間の生命の神聖といふ觀念も持つてゐない。族人の生命は血縁者なるが故に神聖なのである。同じくトーテム動物の生命は蠻人にとつては同胞なるが故に神聖犯すべからざるものなのである。サラセン人は駱駝を殺すに丁度蠻人がトーテムを殺す場合と同じく饑に迫つたときか或は特殊な宗教的儀式に非ざれば容易に手を下さなかつた。アラビヤの習俗はトーテムと全く符合する。たゞアラビヤ人に於ては駱駝を私に屠殺する事を忌む感情が自分と同胞であるといふ考からきたといふ直接の證據はない。然しながら駱駝をほふるため全氏族の承諾と参加を必要とすること、これによつてのみ駱駝の屠殺が初めて正當とせられるといふこと、之が間接の證據であると認めることが出来る。

かやうな習俗は單にアラビヤ人の一種族に於てのみ行はれたものでない。全セム人がかつて經過したものである。古代セム人種は他の未開種族と同じく神と人と動物との性質に嚴重な差別を設けな

つた。(a) 神々と人間 (b) 神々と聖獸、(c) 人間の家族と動物の種屬との間に眞の親族關係を認めるのに躊躇しなかつた。たゞ第三點に關する直接の證據が斷片的な特發的なものである。人と動物との間の親族關係はセム人の間にも認められたといふことは、充分證據だてることが出来るがかやうな觀念が普遍的なものであり、セム人の祭祀がその基礎の上にきづかれたといふことを證據だてるには不充分である。然しながら以上の三點は極めて密接な關係にたつものでその中の二つがもしうちたてられるばその第三は必然演繹せられてくるのである。(a) の神と信者との親族關係は申すまでもなくセムの宗教の根本的教儀である。又 (b) 聖獸が神に對すると同様なる尊敬をもつて遇せられるのもセム人の信仰中に於ける主要な要素である。全ての北方セム人の大神はその聖獸を有してゐる。そして神その物が動物の形に崇拜せられてゐる。一方に於て神々と信者との間の親縁關係、一方に於て神々と動物との親縁關係がセム人の宗教の根本的原理となつておるならば吾人は人と動物との親縁關係も亦同様その根本觀念であつたと論結しなければならぬ。そしてその神聖なる動物は親族關係と同様な尊敬をもつて遇せられるべきである。

神と信者とが一體であるといふ親族關係の上に築かれた宗教に於ては神聖と血縁の兩原理は同一である。血縁者の生命の神聖と神の神聖とは二に非ずして一である。共同の種族的生命、生命と同一視されし共同血液が神聖なる唯一のものである。犠牲獸がもし族人として遇せられたとするならば、それは犠牲が神聖なる動物から選ばれたといふことになる。以上のことを證據だてる事實を吾人はセム人の犠牲のみならずひろく古代人の犠牲全般からも觀察することが出来るのである。(同書二百六十五頁以降)

ロバートソン・スミスの以上の説は未だ學界の定説と稱することは出来ぬ。トイテミズム研究の權威者であるフレイザーの如きなほスミスの意見には疑ひをはさんでおる。然しながらよしトイテミズムといふ名に對して警戒しなければならぬとしても祖先の祭に於て神聖な獸を殺し、その血を啜り、肉を食して神と人との結合、族人相互の結合を一層かたくせんとする習俗は原始社會の動物にたいする特種な態度から考察しなければその意義を了解することは出来ない。

支那に於ては犠牲獸は平素屠殺する事を禁せられた。(王制に云ふ、諸侯故なくして牛を殺さず、大夫故なくして羊を殺さず、士故なくして犬豕を食はず、庶人故なくして珍を食はず、云々、勿論この規定は後世のものであり架空的なもので、其儘に服膺する事は出来ぬが、幾分は古代思想の痕迹を傳へるものと認められやう。)犠牲の肉はひろく一族のものに分配せられた。(左傳僖公四年及び九年の條参照)かつ犠牲の牲なる文字は原始民族團體なる姓と本來同音同義であつたらしい。

これらの事實より推して考へると犠牲といふ習俗がけして神に食物を献ずるといふ單純な動機より出たものでなく、動物の血をもつて同じ族人の血であると見做し、動物をもつて氏族の共同的生命の權化であると思惟した時代の遺風であり、之をもつて氏族の結合を増さんとした手段であつたと云はねばならぬのである。

五

祖先祭祀の重要な意義は氏族の團結を促した點にある。素朴な考へをもつてすれば氏族は家族の擴大せるものであり、家族的血縁の關係がその基調をなしておるやうにおもはれる。しかしながら事

實はこれと反對で原始氏族はけして家族の延長ではない。未開人は己の氏族の女と結婚しない。必ず他の部落の女を妻とする。そしてその生子は母系の場合に女の手許に引取られ、父とはごく疏ましい關係にたつておる。父母及び生子が一團として構成しておる小家族は未開社會に於ては起源のあまり古いものでない。原始氏族はかくの如き小家族に先立つて存在したものといつてよい。次に共同の或一地域の上にすむといふことも氏族生因の重要な要素ではない。土地を基本として社會團體の形成せられたのははるか後代の國家組成時代である。氏族形成のもつとも重要な原因はむしろ祭祀にあるといつてよい。この點は現存人類の中比較的原始の状態を保有するオーストラリア中央の人種が最もよい證明者である。彼等は一年の大半は食物の採取のため散り散りに山野を放浪しておる。或時期がくると一定の場所に集團して祭祀を行ふ。かくして氏族が形成せられるのである。

支那民族が過去において構成した氏族團體には姓と氏の二種類がある。『姓』は各神話的祖先を有し、族員はその祖先の祭祀を行ふことを義務としてゐた。左傳僖公二十六年に芋姓の祖先祝融と鬻熊を祀らざりし夔子が楚のため亡ぼされたことが記してある。もとよりこれは弱國を併さんとする楚の口實に過ぎなかつたであらうがかゝる思想が民間に流行しておらなかつたならば楚が之に口實をかりることとは不可能であつたと云はねばならぬ。『氏』も祖先の祭をもつて基本とする。祖先の靈は祭祀によつて奉仕せられねば他界に於て饑渴に迫ると信せられた。宗廟の祭を司る者即ち氏族の統率者であり、これを呼ぶに宗子なる名をもつてした。宗なる文字はその構成上より云へば屋内に於ける神事を意味しておる。

之を要するに祖先祭祀は上代支那に於て社會的生活の中核であつた。政治も法律も道德も藝術も換言すれば一切の文化は祖先崇拜の搖籃の中に育生まれ、生長したといつて過言ではない。支那民族の原始文化を窺はんとする者はまづ祖先崇拜の觀念に明瞭なる理解を有せねばならぬ。

支那民族の祖先祭祀に就ては未だ論することが多々あるが又他日筆を改めて論ずることにする。

松 本 信 廣